

III

明治維新と女性

III 明治維新と女性

1 武士の母親

武士の母親は、男子に対しては、一人前の武士として自分に課された役割を果たすことができるように、私情を捨てて厳しく育てた。また、女子に対しては、将来夫を支え子どもを育てる母親となるように、実践を中心とした家庭教育を行った。

【武士の育成】

- 薩摩藩では、藩校 造士館での公的な教育、郷中教育などの地域の教育に加えて、父母から武士としての心構えや基本的態度などを教えられる家庭教育も重要な役割を果たした。これら3つの教育が相まって、明治維新时期に活躍する武士たちが育った。
- 島津義弘(1535-1619)は、武士の子には武士として取るべき行動の道理を幼児期から家庭で教え込むことが大事であると説いた。このような考えは江戸時代を通して尊重され、武家の女性は、婦道(女子が行うべき規範)の実践者として、子どもたちに手本を示しながら教育した。¹
- 武士の家庭では、男児を産み、一人前の武士に育てる任を負うものとして女性は尊重された。夫の御奉公のために妻は一身を投げ出し、母親はプライドを持って我が子の教育に当たった。忍従の苦しさを献身の喜びに変えて、江戸時代の女性たちは精一杯生きていたであろう。²
- 斉彬の母 賢章院は、和漢の学問の素養が高く、鳥取の池田家から島津家に嫁いできた際、輿入れ道具の中に左伝・史記等の漢籍がぎっしり詰まった本箱がたくさんあり、島津家の役人を驚かせたと伝えられている。賢章院は、自らの信念に基づき母乳で斉彬を育てた。また、将来藩主となる身だからと幼少の頃から漢籍の素読を授けるなど、厳しく躾けた。³
- 薩摩の武士の母親は、子どもを自分のものと考え、傾向が男性より強かった。男児が6歳になるまでは徹底的に自ら教育し、後は郷中教育、すなわち地域の青年たちの集団による相互教育に委ねた。この郷中教育の場で軽蔑されるような男児を育てることを母親たちは恥じた。だから躾は厳しく徹底的で、息子たちはいつまでも母親を尊敬することになった。⁴ 母親の教育に関する具体的な史料は乏しいが、明治の元勳たちの伝記からその一端を垣間見ることができる。

1 「鹿児島県教育史」鹿児島県教育委員会編

2~4 「薩摩おごじょ」吉井和子(鹿児島女子短期大学名誉教授)

- 東郷平八郎の母 益子は、家計を支えるため、養蚕、機織り、製茶、味噌・焼酎の醸造まで手がけた。子どもの教育には私情をはさまず、国家の良き人材を育成すべく厳しく躡けた。夜、子どもが寝ている時は、「母とは言え、将来国家の御用に立つ人の頭上を踏むがごときは慎むべき」と、決して枕元を歩くことはなかったという。

薩英戦争の際は、暴風の中、各地の陣所を薩摩汁の入った大鍋を抱え、激励して回ったという。¹



東郷益子(1812-1901)『東郷元帥写真伝』

- 大山巖の母 競子は、巖の幼児期より「日新公いろは歌」(島津家中興の祖とされる島津忠良が作ったいろは歌)、「虎狩の巻」(朝鮮出兵時における薩摩の武士の武勇伝)、「島津家歴代歌」(島津家歴代当主の名前と功績を読み込んだ漢詩)などを口授し、少し大きくなってからは、これを暗誦させたという。²
- 大久保利通の母 ふく子は、寡黙にして慎み深く、沈着にして物事に左右されない人であった。大久保も常に寡黙で、国政に臨むに当たってはいつも冷静沈着であった。重要な行動を起こす時は、事前の準備や注意を万全にし、全く抜かりはなかった。大久保のこの性格は、幼き時分からふく子の教化を受けて育った賜物と言われている。³
- 海江田信義[※]の姉 淑子は、気丈な性格で、兄弟から「女將軍」と呼ばれるほどであった。弟の信義が、ペリー来航の際に「戦端が開かれた時は決死の覚悟で戦い、再び陣地に戻ることはないため決別の手紙になろう」と淑子に書き送ったところ、淑子は「夷敵が強勢とはいえ、数隻にすぎず、堂々たる大丈夫が命をなげうつに値するだろうか。何と胆量が小さいことか。夷敵の首級数個を江戸土産として、家人に再会せよ」と叱責と激励の手紙を返した。⁴

※ 海江田信義は、幕末維新期に活躍した有村4兄弟の長男。改名前は有村俊齋と名乗った。三弟次左衛門は、桜田門外の変で井伊直弼を討ち取り、直後に護衛の彦根藩士に斬られて自害。次弟雄助も加わろうとしたが果たせず、藩命で切腹した。四弟 国彦は、後に第五国立銀行頭取などを務めた。父は兼善、母はれん、淑子は4兄弟の姉。

1 『薩摩婦人の徳』鹿児島県教育会

2 『元帥公爵大山巖』大山元帥伝編纂委員会

3 『大久保利通伝 上巻』勝田孫弥

4 『海江田信義の幕末維新』東郷尚武

- 有村れんが長男の海江田信義に送った手紙には、息子への気遣いの言葉に加え、歳末の大掃除やたんすの据え付けなどの近況、信義の帰宅を心待ちにしていること、また、忍耐強く生きるようにとの言葉（「忍の一字、かんよふ（肝要）の御事」）が見られる。

返々、御めて度御文、国彦殿・小山氏へも
相まわし御めにかけて申候、

御めて度かしく、

去ル十六日の御文、一昨十八日相届、うれ敷ひけんいたしまいらせ候、先々寒さ御障りなふ御勤被成、御めて度御悦申入まいらせ候、此ほといかゝいかゝとあんしくらし候所、よほと御徒せんも御急かしく御とりこみの御事、さつし上まいらせ候、猶大坂へも御下りのよし、寒さの時分御用心被成度、こゝ元ハ何も相替らす無事大元気、一昨日迄にてかへぬりも相済、今日ハ大そふぢいたし、たんすなと入付にきにきしき事、まつかなりにいたし置候、御帰りのほとまち入まいらせ候、此方よりの返事も相届候事と存申候、もはや此方よりハ返事間に合申間敷、帰京のうへと存申候、御申遣し候通り、忍の一字かんよふの御事、こゝ元ハ何も御安心被成候よふねんし入まいらせ候、猶又敦子殿・哥子との御祝給り御戸ニ入置、敦子とのよりの御肴代ハ壺円母遣い申候、左よふ御心ゑ給度候、此度ハ御道中かとそんし申候、何れにも寒むさの御用心返々も御大切に御ほようなし給り度、武運長久いのりまいらせ候、

めて度かしく、

十二月廿日

海江田信義殿 母より

ぶじ

猶々、家内中きく次郎・清次郎相替らすはしつゝき、矢平も早朝より出、夕方帰り、十一時夜まわり三人毎よ毎よおこたりなく候、

めて度かしく、

有村れんの書状【黎明館蔵】



有村れん(1809-1895)【黎明館蔵】



海江田信義(1832-1906)【黎明館蔵】

- 横川郷（現在の霧島市横川町）の高橋甚五左衛門^{じんござえもん}が西南戦争に出陣する際、母親が木板に「賦^{つもり}」という文字を、最後の点を書かずにおき、無事帰還した際に点を書き入れた。無事を祈って行われていた慣習である。

※ 「帰るつもり」の願いを込めたものと言われている。

「賦板」：資料17 (P.150)



「賦板」【黎明館蔵】

【女子への教育】

- 武家の女子は、家庭において母親や祖母から、躰^{しつけ}を中心とした教育を受けた。男子は郷中教育や造士館などを通じて社会全体で教育したのに対し、女子は家庭において母親や祖母から日常の生活を通して武家の女性として躰けられた。少女期には家事の手伝いや神棚の手入れなどを教わり、十代半ばになると家事裁縫に加えて麻糸の紡ぎ方なども教わった。また、琴や三味線を習う者もあった。¹
- 薩摩では、女子への教育は顧みられなかったといわれるが、女子は礼儀作法の訓練、神を敬う精神、感謝の念の育成、美的情操の教育、経済思想、綿密さと忍耐の念、勤勉の徳など、ほとんどすべての教育を、裁縫教育によって得た。指導者は、母、祖母が主であった。²
- 江戸では、武家の娘は大名や旗本の奥向^{おくむき}（台所仕事や洗濯など）に、行儀見習い（起居動作や言葉遣いなどの作法を身に付けさせること）を兼ねて奉公に出た。鹿児島でも、女性に生きていく上で必要な事柄を身に付けさせるこのような慣習はあった。³

1 『郷土婦人の輝』鹿児島県教育会

2 『薩藩家庭教育の研究』鹿児島県女子師範学校編

3 宮地正人(東京大学名誉教授)

2 武士の妻

武士の妻は、夫を支え家庭を守るとともに、子どもを立派に育てることに全力を注いだ。場合によっては、松寿院のように夫の死後、亡き夫に代わって家や地域を支えた女性や、山田歌子のように夫を信じ、苦境にあっても強く生き抜いた女性もいた。

【武士を支えた妻】

- ◎ 第9代藩主 島津^{なりのぶ}齊宣の娘である隣^{ちか}姫（後に松寿院）は、生後3か月で種子島久道（5歳）と結婚し、文政元年（1818年）に長男、翌年に次男が誕生したが、どちらも早逝した。文政12年（1829年）に夫も死去したため、その後14年間にわたり当主不在の種子島家^{ひさみち}※を松寿院が支えた。

天保14年（1843年）に島津本家の久珍（松寿院の実弟）を養子に迎え種子島家の跡継ぎにしたが、久珍も嘉永7年（1854年）に死去した。その子久尚^{ひさなお}は生まれたばかりであったため、再び松寿院が種子島を治めることになった。

松寿院は、大浦塩田の開発、赤尾木港（現在の西之表港）の修築、大浦川の改修など、種子島の産業振興に力を注いだ。



松寿院(1797-1865)
【熊野神社(中種子町)蔵】

※ 種子島家は中世以来種子島を治めた領主で、江戸時代の家格は一所持^{いっしょもち}。

卷七十七

（万延二年三月）四日、先是、平山村鹵田歳中経費、祖母夫人以其私蔵之金償之、至是請于府庫、令出二分之一、塩価亦二分而各収其一、

卷七十八

（文久二年七月）二十八日、是月前港波戸成矣、安政庚申四月興役、至是凡閱三年而功竣る、乃使後醍院真柱以邦語撰碑文、刻石建之、如祖母夫人之意と其功勞勲藉則後醍院氏言之、
「種子島家譜」

【大意】

卷77

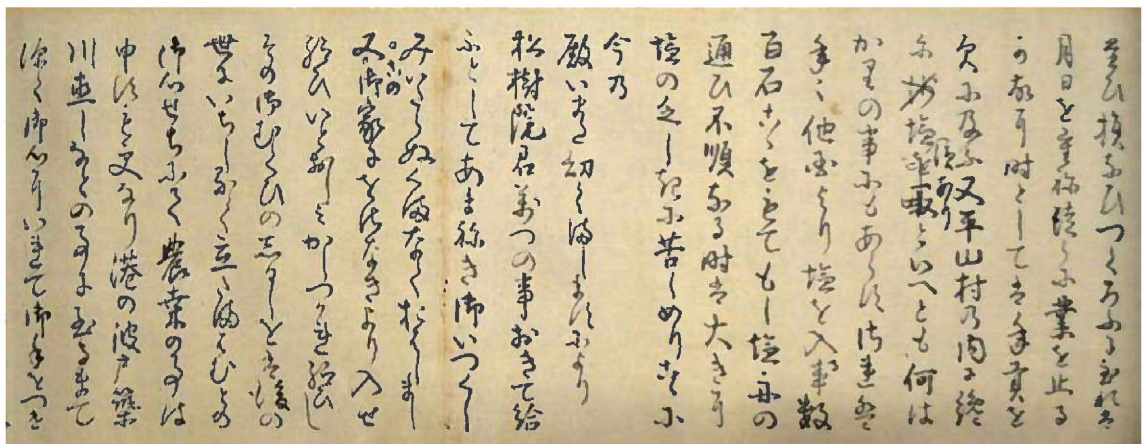
（万延2年，1861年3月）4日。以前，平山村にある塩田の年間の経費は、

1 鎌倉時代から明治時代までの、種子島家の系譜や関係史料をまとめた歴史書。『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ九』に収載。

祖母夫人(松寿院)が個人のお金を出して、費用に充てていた。今回から藩の財政担当に依頼して、半額を(藩から)出させて、塩の利益も折半して、(藩と種子島家で)その二分の一ずつを納めることになった。

卷78

(文久2年, 1862年7月)28日。この月, 前ノ港の波戸(堤防)が完成した。安政7年(1860年)4月に工事を始め, ここまで約3年間をかけて完成した。そこで, 後醍院真柱(幕末期の薩摩藩の国学者)にやまとことばで碑文を作らせ, 石に刻んでこれを建てた。祖母夫人(松寿院)の意志と, その功績については, 後醍院氏がこれを述べた。



【自凝舎遺稿】【黎明館蔵】

自凝舎(後醍院真柱の号)の文章をまとめたもの。松樹院は松寿院のこと。

- 文久2年(1862年)に大名の妻子が江戸で生活する義務が撤廃され、島津家の女性たちが鹿児島に帰ってくるようになった。この時、第10代藩主 島津斉興の妹で江戸藩邸に暮らしていた勝姫(元は閑姫。浜田藩(現在の島根県浜田市)藩主の嫡男 松平康寿と婚姻したが死別。)が、斉興が築き、お由羅(斉興の側室)が住んでいた玉里邸で暮らすことになった。お由羅は慶応2年(1866年)に死去したが、勝姫はその手向(死者を偲ぶ文)で「自分が初めて鹿児島に来た時に、真了院^{しんりょういん}は喜んで玉里邸に迎えてくれ、何かと心配りをしてくれた。鹿児島を知らない自分に本当に良くしてくれた真了院が亡くなって残念だ。」とその思いを綴った。

* 「真了院」は、夫 斉興が亡くなってからお由羅が名乗った名前。

(前略)此地へ下る折柄も住居の事、其ほか何くれと心を添、せちに物し給り、此御館へ着しかばよろこはせ給ひ、まめやかにせわなしいつくしみ恵ませ給ふ、情の深きは千ひろの海も及なきまで忝なさ、四季折々の詠もともにして楽しみ暮せしに引かへて、かゝるわかれに成まし、悲敷残惜さ限なし、(以下略)

【勝姫手向草】【玉里島津家資料・黎明館蔵】

【大意】

鹿児島へ下向する際も住む屋敷の事、その他何かと心を配り、親切に対応していただき、この屋敷に着いた時はお喜びになって、心を込めて世話をして大事にしてくださった。情けの深さは千尋の海の深さにも及ばず、感謝に堪えない。四季折々の歌を詠むなどして楽しく暮らしていたのに、このような別れになってしまい、悲しく心残りなことは限りない。

「勝姫手向草」：資料18 (P.151)

- 鹿児島城の「二之丸奥右筆間日記(二之丸奥日記)」には、息子の忠義が藩主となった後に二之丸を居所に定めていた島津久光とその家族の動向なども記されている。文久3年(1863年)に久光が率兵上京で出発した後、二之丸に届いた久光の情報は、息子の身を案ずる母 お由羅^{ゆら}に伝えられた。また、久光の無事を祈るお由羅に代わって、奥女中による寺社への代参も行われた。

(文久三年三月六日)

一 今日山川より御飛脚参り、御前益御機嫌よく山川六ツ時御出ばん被為有候段御左右申参り候事、則

悦之助様御初へ申上、玉里へも御うつシにて御廻し申上候事、

一 今日御日柄もよろしく、福ヶ迫五社御初御神々様へ

仲津

かち初

参り候事、

「二之丸奥右筆間日記」【玉里島津家資料・黎明館蔵】

【大意】

(文久3年, 1863年3月6日)

一 今日山川(現在の指宿市山川^{いぶすき})から飛脚が来て、久光様はお元気で山川を六ツ時(午前7時頃)に出港なされたと、御様子を伝えてきた。そこで、悦之助様をはじめ皆様へ申し上げ、玉里へも写しを廻送した。

一 今日日柄が良いので、福ヶ迫の五社をはじめ神々様へ(奥女中の)仲津とかちをはじめお参りに行った。

「二之丸奥右筆間日記(二之丸奥日記)」：資料19 (P.152)

- 坊津ぼうのつ（現在の南さつま市坊津町）の士族 小原茂七郎は、西南戦争で捕らえられ、帰郷後は事業に失敗し破産した。田畑や家屋敷を失った家を支えたのは妻 ハセで、裁縫と機織りで生計を立て、村の娘たちのために裁縫家塾を開いた。

その息子の国芳は、苦学して広島高等師範学校、京都帝国大学で教育学を学んだ後、昭和4年(1929年)に玉川学園を創設し、故郷の坊津にも昭和23年に玉川学園久志高等学校(昭和54年廃校)を設立した。¹

- 山本英輔海軍大将の母 ノブは、結婚後約1年ほどで夫 吉蔵(薩摩藩士で、明治初期に北海道開拓使の屯田兵となり、西南戦争には官軍側で参加)を西南戦争で亡くした。その時のことをノブは「避難先の桜島から帰ると、家は兵火に焼かれ、食うに食えず本当に困った。まずは有り金全部で家の普請(建築工事)をし、人の針仕事をしたり、機織りをしたりして、老いた姑と母子の飢えをしのいだ。その後、授産社*の女工になったが、道を通れば悪口を言われ、あるときは水を掛けられ、授産社の門限があるため着物を着替えに行けず、全身ぬれねずみになって働いた。」と語った。²

* 西南戦争後の明治13年(1880年)に、鹿児島復興と士族授産のために渡辺千秋県令が設置した「鹿児島授産場」。製糸業や煙草製造などを行っていたが、明治23年に民間に払い下げられた。

- 明治22年(1889年)に宮之城村えいしん(現在のさつま町宮之城)益進尋常高等小学校に教員として赴任した新潟出身の本富安四郎ほんぶやすしろうは、『薩摩見聞記』の中で当時の鹿児島の女性について、以下のように記している。

- 西南戦争に出征した者は皆若く、既婚者でも結婚から間もない者が多かった。出陣の時に、積もった雪の上を若い妻や姉妹が裸足でお堂にお参りして、無事に帰ることを夜を徹して祈願したという。
- 薩摩の女性は、愛嬌よりも凛とした気風をしており、姿勢正しく血色が良い。華奢な人は少なく、労働に耐える丈夫な体をして、男性よりも健康であった。



女子ノ図「薩摩見聞記」

- 鹿児島は大阪と交通があったため、上級士族の女性は大阪風で、最近(明治20年頃)は東京との交通もあるので東京風も加わってきた。鹿児島市外の地方では袖も裾も短い着物を着て、質朴の風が強かった。

【薩摩藩士に嫁いだ女性】

- ◎ 京都に生まれた山田歌子は歌才に秀でており、近衛家に奉公し、後に近衛家へ出入りした薩摩藩士 山田清安(国学者で歌人)の妻となった。清安が嘉永朋党事件(お由羅騒動)で切腹した後、歌子は自害を願ったが許されず、藩庁は歌子が京都に帰ることでお家騒動が藩外に漏れることを恐れ、種子島に配流した。

歌子は、種子島で京都の桂園派の歌風を広め、種子島歌壇に革新をもたらした。¹

卷七十六

(万延元年)八月十八日、藩士山田市郎左衛門之妻山田氏宇多死、先是其夫市郎左衛門有故官賜死、為流其妻山田氏宇多を吾島、有所諱、陽以求婚為名、祖母夫人愍山田氏宇多之志操貞正而罪非其罪、使市人柳田休五郎第二子休助母事之、至是而死、乃命休助稱為其嗣、厚葬之雲之城、与休助以其旧住宅地、以為喪主、

「種子島家譜」²

【大意】

卷76

(万延元年, 1860年) 8月18日。藩士 山田市郎左衛門(清安)の妻, 山田氏(歌子)が死去した。以前, その夫 市郎左衛門は事情があって, 藩は(市郎左衛門に)死を与えた。そのため, 妻の山田氏(歌子)を我が種子島に流した。はばかりところ(お家騒動)があったためである。表向きは結婚をするためということの名目にした。祖母夫人(松寿院)は, 山田氏(歌子)が意志が強く貞節を守る正しい人物で, 罪状も本人の罪でないことを憐れに思い, 町人の柳田休五郎の次男の休助に, 歌子に対し母として仕えさせた。この日(歌子が)亡くなった。そこで休助を歌子の跡継ぎとして, 雲之城の墓地に手厚く葬り, 休助に歌子の旧居を与えて, 喪主を務めさせた。

1 『女たちの薩摩』日高旺

2 鎌倉時代から明治時代までの、種子島家の系譜や関係史料をまとめた歴史書。『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ九』に記載。

3 農村の女性

農村の若い女性の中には奉公に出される者も多く、奉公先では給金の代わりに着物をもらう衣裳奉公^{いしやうぼうこう}が行われた。また、農村では女性も男性と同様の労働力として位置付けられていた。さらに、夫役^{よやく}等で男性が動員されると、女性はその分の労働も負担しなければならなかった。

- 鹿児島は台風の常襲地帯であり、また、火山灰土壤に覆われ、稲作では十分な収穫を上げ得られず、経済的に厳しいところだった。したがって、農村においては、男性も女性も協力して耕作に取り組まなくては農業経営が成り立たなかった。¹
- 一般的に、独身男性に対し適齢期の女性は少なかった。女子は奉公に出されて生家を去っていくことが多かったからで、農村では嫁不足の深刻な社会問題を起こしていた。
【顔娃町郷土誌 改訂版】
- 野町^{のまち}（商業地域）から在^{ざい}（農村）への縁組は許されていたが、在から野町への縁組は、農業生産力が減少するという理由や、商業の発展を抑える意味から禁止されていた。
【吾平町誌 上巻】
- 木綿糸や麻糸紡ぎはもっぱら主婦たちの仕事で、毎晩食事の後片付けをし、膳棚や戸の拭き掃除を済ませてから夜なべ仕事をしなければならなかった。主婦たちは、灯火や燃料の節約のため、順番に近隣を廻って夜が更けるまで糸紡ぎをした。
【樋脇町史 上巻】
- 慶応の頃も大人一人の着料一揃^{ひとえ}といえ、^{かたびら}「綿入れ一枚、単衣一枚、帷子一枚、小数衣一枚、前垂れ一枚、前垂れ上衣一枚ぐらい」で、娘を奉公に出す場合も給金代わりに衣類を受けることもあり、衣裳奉公^{いしやうぼうこう}といていた。
【串良郷土誌】
- 江戸時代の身分制度においては厳しい掟があり、着物の仕立方や色、柄までも区別されていた。着物は、盗難が厳しく取り調べられるほど貴重であったため、鹿児島では古くから衣裳奉公^{いしやうぼうこう}といて、給金の代わりに着物をもらう習わしがあった。
【金峰町郷土史 下巻】

1 『薩摩おごじょ』吉井和子(鹿児島女子短期大学名誉教授)

- 農家の経済は自給自足のため、油・味噌・醤油・焼酎に至るまでほとんど自家製で、市や行商に依存するのは塩・海産物・日用品・農具ぐらいのものであった。味噌つきの日は、親類や近所の主婦たちと結をして世間話に興じながら手杵でついた。娯楽物の少ない農村では、味噌つきなどが娯楽でもあった。『入来町誌 上巻』
- 薩摩藩の天保の改革に協力した大坂商人の高木善助は、枕崎を訪問した際、同地の女性について、次のように記している。

二月晦日曇天、折々小雨、昼後雨

(前略)夫より鹿籠に至る。坊より一里計、此津に折ふし漁舟渚に群集し、所の女頭に竹籠をいたゞき鮮魚を盛りて帰るあり。又空籠をいたゞきて行ありて賑かなり。(中略)此夜予て此地に名高きしよんがぶしを聞んとて宿の主人にかたらへば、折よく三人の女が出来り焼酎など出し酒もりしてもてなし。彼歌をきく。誠に古雅なるものなり。総べて薩州にては、しよんがぶしとて貴賤上下専ら是をうたふ。太守も折々脇浦・川尻などにて、所の女を召て、御前にてうたはせ給ふよし。

『薩隅日三州経歴之記事』¹

【大意】

2月30日 曇り時々小雨、午後雨

(前略)それから鹿籠(現在の枕崎市)に着いた。坊津(現在の南さつま市坊津町)から1里くらい。この鹿籠の港にちょうど漁船が海岸にたくさん集まり、ここの女性の中には頭に竹籠を載せて、鮮魚を盛って帰って行く者もいる。また、空の籠を載せて海岸に行く者もおり賑やかである。(中略)この夜、以前からこの地で名高いシヨンガ節を聞きたいと宿の主人に話したところ、ちょうど3人の女が来て焼酎などを出してもてなしを受け、その歌を聴いた。誠に古風で雅びであった。総じて、薩摩ではシヨンガ節を貴賤にかかわらずよく歌う。藩主もしばしば脇浦・川尻(ともに現在の指宿市開闢)などで、土地の女性を呼んで、御前で歌わせているという。

- 戊辰戦争で伊作郷(現在の日置市吹上町伊作)から参加した人員は郷士64名、夫卒24名の計88名。このうち郷士20名、夫卒3名が死亡した。働き盛りの男子の長期不在は、百姓の家族や門の経営に大きな打撃、損失となり、その負担は妻や幼い子どもたちが負うことになった。

1 『日本庶民生活史料集成 第二巻』に収載

- 奄美では芭蕉布ばしゅうふが大量に生産され、島民の普段着のほかに、藩の買取や藩への献上用、そして琉球への交易用として用いられた。

芭蕉布は、芭蕉の茎の繊維から芭蕉糸を紡ぎ、これを織って作るが、それは主に女性の仕事だった。『南島雑話』¹にも、「島中皆この服にして、家々の婦人手製困苦を尽くせり」と記されている。



「琉球寫真景」【名護博物館蔵】

また、江戸時代後期に四条派の絵師 岡本豊彦が奄美の自然や人々の暮らしを描いた「琉球寫真景」にも、芭蕉山から刈り取った芭蕉の茎をティル（竹籠）で運搬する2人の女性が描かれている。

- 桂久武は、大島守衛方などを命じられ、文久2年（1862年）から2年間大島代官所で勤務し、その時に芭蕉布等の奄美の女性が作る織物に触れた。明治4年（1871年）の廃藩置県で、旧大隅国を中心に設置された都城県の参事（知事）となった桂は、巡視中に世話になった人々へ紬を贈っている。この紬は奄美から取り寄せたとも考えられ、その後、明治20年頃から都城周辺で紬生産が盛んになり、また、都城と奄美の間で人の交流が活発化する背景の一つは、桂がもたらした紬にあったとも言える。²

明治5年3月17日

- 一 安井ニハ折生迫より付添別て世話に預候故紬嶋一反差贈云々事、
- 一 宿亭主へ紬嶋一反・紺かすり一反遣候、
- 一 橋口三治へ紬嶋一反与へ置候、

「都城縣在勤日記」³【個人蔵】

【大意】

明治5年（1872年）3月17日

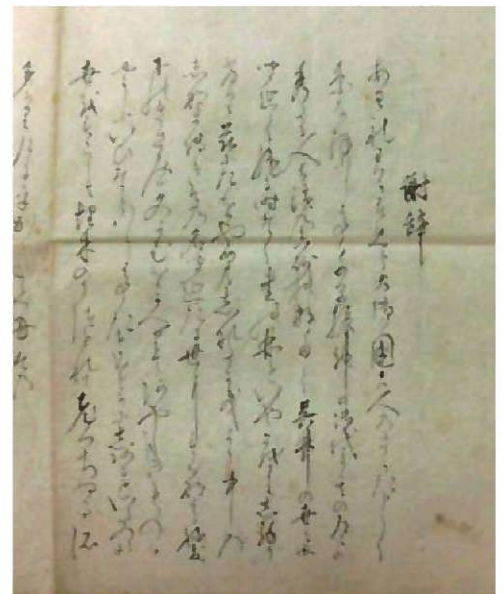
- 一 安井には折生迫から付き添い、特に世話になったので、縞の紬一反を贈った
- 一 宿の主人に縞の紬一反と、紺かすりの紺一反を贈った
- 一 橋口三治へ縞の紬を一反与えておいた

1 嘉永2年（1849年）のお由羅薩動に連座して奄美大島に遠島になった薩摩藩士 名越時敏（左源太）による記録。
 2 弓削政己（奄美市文化財保護審議会会長）
 3 『鹿児島県史料集（26）桂久武日記』に収載

4 明治維新後の女子教育

明治維新後、女子にも学校教育を行うべきとの考えが生まれ、次第に女子教育も充実していった。中には高等教育を受けるために東京へ派遣される女性もあり、社会貢献を目指す女性も現れた。

- ^{ありのり}森有礼が明治2年(1869年)に鹿児島に作った英学塾は、古市静子という種子島出身の女子学生を受け入れている。古市は、東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)に進学し、明治19年に駒込幼稚園を創設、我が国幼稚園教育の草分けとなった。¹
- 城下士の娘 押川^{えい}栄は、鹿児島の女性として最も早い時期に高等教育を受けた人物で、明治9年(1876年)に県から派遣されて東京女子師範学校に入学している。同年11月に上京した県令 大山綱良に面会した押川は、「恩に報いるため、勉学に努めて早く国家のために尽力したい」と述べている。



卒業式での押川栄の謝辞【黎明館蔵】

大山令公ノ帰県ヲ送ル文

方今文運隆盛ニシテ学校ノ設ケ日々ニ備リ女学モ亦従テ興ル、夫レ女学講セサル事久シ、今ヤ都鄙ノ別ナク、苟モ人タル者誰カ学ハスンハ有ル可カラス、嚮キニ令公女学ヲ興スニ意アリ、鄙女等ヲシテ遠ク京地ニ出遊セシメタリ、尔来其恩ノ大ナルニ感シ、此校ニアル約ネ六閱月日夜孜々以テ国恩ノ万分ノ一ヲ報セントス、頃日令公閣下此地ニ上京アリシヤ嘗テ面謁ス、其言ノ懇懃ニシテ学ヲ勉メシムルノ情溢然タリ、且ツ賜フニ物ヲ以テスル数度、鄙生等豈感奮慙激セサランヤ、鄙生等勉励シ早く卒業シ国家ニ尽力セントス、令公閣下将ニ返ラントス、鄙生等相語テ云ク、鄙生等令公閣下ノ恩ヲ辱フスルコト幾許ソヤ、何ソ黙々ニ付ス可ケンヤト、乃チ

1 犬塚孝明(鹿児島純心女子大学名誉教授)

平生作ル所ノ書ヲ以テ送ル、時氣寒冷万里波濤幸ニ自愛セヨ、再拝、
九年十一月十三日 押川栄 [押川栄 備忘録]【黎明館蔵】

【大意】

大山令公の帰県を送る文

現在、文化の勢いは盛んになり、学校は日々整備され、女学校もこの動きに従って盛んになった。女子に学問が行われなかったことは長かったが、今や都会も田舎もなく、人であればあらゆる人が学ぶ中で、(大山綱良)県令公は女学校を興す意向で、(私達)田舎の娘を遠く都に送り出してくださいました。以来その恩が大きいことを実感し、約6か月間日夜一生懸命努めて、国から受けた御恩の万分の一でも報いようとしてきた。最近(大山)県令公閣下が東京に来られたのでお目にかかった。(大山県令公の)言葉は丁寧で、勉学に向かわせる情熱であふれていた。また、贈り物も数度にわたって頂いた。(私達)田舎の学生がどうして感激しないことがあるのか。田舎の学生は勉学に努めて、早く卒業し国家のために尽力したいと考えている。大山県令公は今まさに帰ろうとしている。私達は語らって(大山)県令公閣下の御恩に対し感謝に堪えない。どうして(大山県令が東京に来たこの機会に)沈黙してられようか。そこで普段から学んでいた書を贈る。時節柄、寒さが厳しいのでご自愛されたい。

(明治)9年(1876年)11月13日 押川栄

- 鹿児島では、女子教育を行う学校は、明治10年(1877年)の西南戦争の後に整備されていった。¹
- 伊作村(現在の日置市吹上町伊作)の村長宇都為栄は、明治13年(1880年)に伊作小学校附属裁縫学校を設立した。この時期に女子の初等職業学校を設立したことは特筆すべきことである。
同校は明治26年、伊作女子実業補習学校に改組され、我が国最初の実業補習学校となった。²
- 明治10年(1877年)に青少年の投稿雑誌として創刊された『^{えいさいしんし}穎才新誌』には、鹿児島の女学生からの投書も掲載されている。その中には、上京する学友への送別の言葉や、刻苦勉勵の重要性を訴える文章などがあり、社会の役に立つ人材になろうという意欲を読み取ることができる。

1 「明治12年10月9日付朝日新聞」(「鹿児島県下の女子師範学校が学則改良で活性化」)

2 「明治26年10月6日付東京日々新聞」(「実業補習学校の囁矢」)

第百三十一号 (明治12年9月6日)

友人ノ東京ニ遊学スルヲ送ル

鹿児島女子師範学校 本科第五級生 田尻国 十二年五月
謹デ寸楮ヲ上級足下ニ呈ス、足下固ヨリ本校生徒ノ魁座ニ在リ、穎達非凡ナル世人常ニ熟視スル所ナリ、目下当県学事ヲ盛大ニシ、且早ク幼稚園ヲ設立セラレ、今般更ニ保姆練習ノ為ニ名ノ生徒ヲ精撰シ、東京女子師範校ニ出サントス、而シテ其任ニ堪タル者鮮シ幸ニ足下等在ルニ依リ、県令ノ特旨ヲ以テ大都会ニ遊学セシム生徒タル者ノ幸遇何事カ之ニ如カン故ニ、今ヨリ後ハ益身体ヲ壮健ニシテ勉学ニ従事シ、速ニ卒業シテ帰県シ育児ノ良法ヲ施ストキハ闔県ノ児童足下等ノ為ニ善良博識ノ開進ヲ促、実ニ無上ノ幸福ナラン、依テ聊鄙言ヲ呈シ之ヲ祝ス再拝、
「顕才新誌」

【大意】

第131号 (明治12年, 1879年9月6日)

友人が東京に遊学することを送る

鹿児島女子師範学校 本科第五級生 田尻国 12歳5か月
謹んで短い手紙を先輩に差し上げます。貴女はまさに本校生徒の首席です。抜きん出て素晴らしいことは世の人がいつも注目するところです。現在、当県の学問は盛んになり、かつ、早期に幼稚園も設置され、今回さらに保母の勉強ということで2名の生徒を厳選して東京女子師範学校に送り出そうとしています。その任に堪えられる者は少なかつたけれども、幸い貴女たちがいたので、県令の特別の意向で大都会に遊学させることになりました。生徒にとっての幸せでこれ以上のことがありますでしょうか。そのため今後はますます身体を健康にして勉学に励み、早く卒業して帰県し良い指導を行うことで、県下全ての児童が貴女の善良で広い知識により、進歩が促されることは、この上ない幸福でしょう。略儀ながらお祝い申し上げます。

